

自分に向き合い、自ら道を切り開く



和田 淳さん [教養学科 芸術専攻 美術コース 2004年卒]
短編アニメーション作家

1980年・神戸生まれ
2004年・教養学科芸術専攻美術コース卒
2005年・イメージフォーラム映像研究所卒
2010年・東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了
ファンタジーバーデン国際アニメーション映画祭(スイス)「わからないブタ」最優秀賞
2010年度文化庁メディア芸術祭「アニメーション部門」優秀賞
DVD「和田淳作品集2002-2010」

<http://calf.jp/>

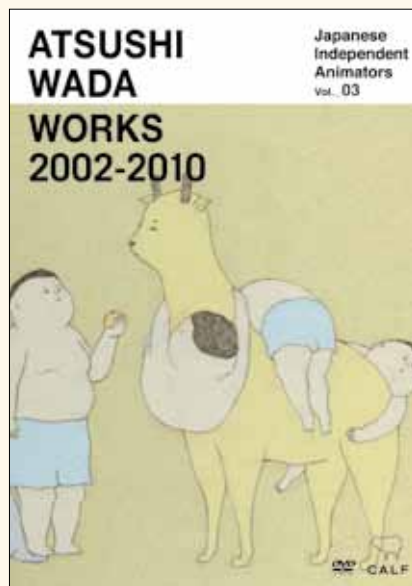
インターネットショップCALFにて発売中 <http://calf.jp/>

「作り続けること、それが目標です」

短編アニメーション作家、和田淳さんは力強く語ります。2002年から作品を発表しています。しかし、国内での短編アニメーションは、認知度が低いといえます。制作には手間も時間もかかり、金銭的にも「作り続ける」ことが難しい環境です。

和田さんの作品は、独特のタッチの絵と絶妙な間が特徴のアニメーションです。すべて手描きの鉛筆で表現され、CG等は使いません。その作風は、すでに世界各国で高い評価を受けています。作品はフランスやクロアチアなどの映画祭で上映され、スイスのファンタジーバーデン国際アニメーション映画祭ではグランプリを受賞しました。さらに、最新作『春のしくみ』はベネチア映画祭オリゾンティ部門にノミネートされ、話題を呼びました。

また、映画『ゲゲゲの女房』のアニメーションパートの担当や、無印良品のポスターイラスト制作、オタワ映画祭で審査員を務めるなど、活躍は多岐にわたります。新しい試みにも積極的で、世界で評価されながらもソフト化されていない映像作家の作品を世に発信するDVDレーベル「CALF(カーフ)」に設立時から参加しています。そのCALF配給・宣伝で昨年11月には、自身初となる映画館での1週間の特集上映「和田淳と世界のアニメーション」を企画し、反響を呼びました。**「作り続けるためにも、より多くの人に短編アニメーションの魅力を知ってもらいたい」**



そのために国内に限らず世界各国を飛び回り忙しい毎日を送っています。

しかし、大学に入った頃まではアニメーションに全く興味はありませんでした。きっかけは3年生のとき、ノートのすみに描いたラクガキでした。ふと『これが動いたらおもしろいのではないかと』思い、「自分で描くことで、思う通りの世界を表現できる」ことに魅力を感じたそうです。

アニメーションの基本は、パラパラ漫画のように少しずつ動いた絵を描くことです。そのため1枚1枚絵を透かしながらかきます。

しかし、大学には基本を教えてくれる授業も、必要な道具もありませんでした。何をすることも手探り。蛍光灯で紙を透かして描いたり、紙がズレないように手で押さえたり、本当に正しい作り方なのか不安だったといえます。しかし、周りの応援とアドバイスのお陰で続けてこられました。また、同級生と定期的に展示会を開き、互いの作品をみせあいました。

「大教での学生生活は、友人たちと刺激あい、自己表現を磨くとても大事な時間になりました」

2007年からは、非常勤講師として本学でアニメーションを教えています。授業では、アニメーションの元祖とも言える「驚き盤」の作成や、実写をコマ撮りするピクシレーションなど様々な手法の表現を教え、少しでも興味をもつことができるように工夫しています。それは、ただなんとなく単位のために授業に出ていることをもったいなく感じるからです。

「せっかく大学にいる限りは、何でも吸収することができるし、してほしいと思います。そのためにも、自分が何をしたいのか、日々自分と向き合って葛藤してほしい」

自分と真摯に向き合い、自ら道を切り開いていく姿勢は、芸術活動に限らず多くの学生に刺激を与えるでしょう。